市民学校から③

21世紀へのはばたき

品原淳次郎氏　（高知放送取締役社長室長）

私の人生、そして、皆さんの人生も大きな国の流れとともに変化してきました。自分が、こう生きたい、こんな生活を送りたい、と思っても人生必ずしも自分の思う方向には、進ませてくれません。

私は青春を戦争末期に過ごさざるを得ませんでした。昭和六年が小学校の入学の年で、満州事変が始まった年。そして、中学校卒業の前年に大東亜戦争に突入と、ちょうど人生のくぎりが戦争と結び付いています。

運命と個人の人間の生きる道というものが、それぞれの人、それぞれの国家に常にあることを二十一世紀を前にして、少し過去を振り返ってみたいと思います。

二十一世紀まであと十六年になりますが、これまでの八十四年間、日本が、どう歩んできたかというと、日清戦争と日露戦争との中間に二十世紀を迎えています。

明治に舞台が変わり、少しずつ世の中が近代化され、新しい世界との交流が始まります。江戸時代にはいろいろな良い物が芽生えていましたが、それを思うよりも外国に後れを取ったということに目が向いていきます。そして、すべて外国が優れているという間違いも起こしますが、全体としては新しい時代の夜明けが広がっていきました。

そして、大正、昭和と時代が過ぎていきます。

昭和の初めの大恐慌は、大変な苦しみでした。そして、日本が生きて行く道を探り出すために大陸へ目を向け、それが昭和六年の満州事変、中国との戦争へと拡大します。これは日本を救うつもりだったかも知れませんが、やがて多くの人たちを戦死させ、破局を迎えます。

そういう世界のうねり、日本のうねりの前には、一人の人間の望みだとか、命だとかいうものがいかに弱いものだったかを知らされました。しかし、この大きな流れを誰が作るのか、と言えば一人一人の国民が作ることなんです。それを誰かが作るように思うことが誤りで、みんなが毎日の生活の中で積み重ねてきたことが、自分たちの運命を形作るものです。

戦争が終わって周囲を見回してみると、まったく何もなかった。しかし、日本に資源が乏しくて、何も無い、その悪い材料が発展への大きな基礎になった。運命とはそういうものです。

人間の一生もそうです。たとえば、恋人と別れてしまう。そのことは悲しいことであるけれど、もう少し長い目でみると、その別れがその人にとって、いかに大事なことに生かされるか、それが人生を幸せにするか、しないかの別れ道だと思います。悲しいことなんだが裏からみると、大変な教訓であったり、力づけであると思えば、そこから明るさが出てきます。

文化とは何か、文化ということを概論的には言えると思いますが、私の言いたいことは、こうです。

朝、バスに乗って出社するとき幼稚園児が、たくさん乗ります。そして、降りるときにみんな運転手さんに「ありがとう」といって次から次へ降ります。本当に明るい声です。ところが、小学校の中学年くらいになると、もう「ありがとう」は言わなくなるんです。

ちゃんと「ありがとう」と言えて通っていた子どもたちが、言わなくなる、そういう教育が文化なのか。人に感謝しなくなるのが教育をすることなのか、私のいう文化とは、そうではないんです。

戦争が終わって、その焼け跡から家を築き、家庭を築き、社会を築き、国を築いた。そして、学校もきれいになった。さらに日本人が世界の人たちに役に立つ人間になるように育ててきたつもりなんですが、今、子どもの言うことばかり聞くような家庭ができ、その子どもたちが、大人になりつつあります。

貧しい中からいっしょうけんめい育てられた子どもたちが、今、自分の子どもに対する自信を失って、しつけができません。

そうして育てられた子どもが、大人になったとき二十一世紀を迎えます。そして、そのときに、いったいどういう世の中になっているのか問題です。

今、しきりにニューメディアの時代といわれています。これは、これからの我々の生活などを大きく変えていく材料、産業であり、情報の伝達手段です。これが、だんだん広がっていきます。しかし、人間を幸せにするか、という問題がでてきます。お年寄りや若者との較差、あるいは、社会での較差が増す恐れも多分にあります。

また、世界中には、貧しい地域がたくさんあり、その人たちをどうやって抱きかかえていけるか、そこまで目が届いていません。

二十一世紀へのはばたきの舞台はできています。その中に生きる我々が本当に人間らしく、本当に健康で幸せに生きるためには、科学技術が前進すると同時に手を打たなければならない問題が、たくさんあるのではないのでしょうか。

「市民学校」の講演内容の掲載は、今回で終わります。